

部活動報告

吹奏楽部の2年間を通じて（上）

峯岸 優介

Yūsuke MINEGISHI

1. はじめに

平成26年4月1日に本校の国語科教諭として國學院高等学校に足を踏み入れた。そして最初に担当することになったクラブは男子硬式テニス部と吹奏楽部であった。どちらも副顧問としての立場からではあるが、この2つのクラブの中の吹奏楽部の2年間のうちの初年度の1年間で感じたものや、その当時の活動を報告する。今回は上半期の活動を報告する。

2. 2014年（平成26年）4月～2014年8月までの活動報告

（1）吹奏楽部員との初顔合わせ

本校に着任して数日したある日、吹奏楽部顧問の瀬立聡先生に連れられ、初めて吹奏楽部員と顔を合わせた。最初に抱いた感想は「学校が違ふとこれほどまで雰囲気が違うのか…」というものであった。私は中学・高校と男子校出身であり、所属していた音楽部^{(*)1}はいわゆる「体育会系」のクラブであったため、その明るい雰囲気に対して率直に「文化の違い」というものを感じた。そして、部活動の休憩時間に「幹部」と呼ばれるリーダーたち（大半が女子）に「私は○年△組□□□パートの×××××です！」という紹介をされ、その勢いに圧倒される。ここでは「素直で明るい子たちだな」という呑気な感想を抱いていたが、後にそのことが悩みの種になるなどこの時は知る由もない。

（2）5月に開催された「定期演奏会」

① 「定期演奏会」と「会場」について

全国の高校吹奏楽部の多くは年に1回（数回公演する学校もある）「定期演奏会」という演奏会を開いている。この演奏会は何かのイベントに参加する本番ではなく、その学校の吹奏楽部が「単独」^{(*)2}で行う、いわば「集大成」のような演奏会なのである。

この演奏会は、規模が大きい吹奏楽部であれば外部施設（ホールなど）での開催が可能となるが、金銭面の負担が大きいので校内の体育館や講堂で行う学校も少なくない。そんな中、本校の吹奏楽部は幸運にも外部施設（ここ数年は「杉並公会堂」^{(*)3}という杉並区のホールで開

催)での開催となっている。しかし、この外部施設での定期演奏会開催にたどり着くまでの道のりは容易ではなく、顧問の瀬立聡先生の並々ならぬご尽力の賜物であったことも伺い、身の引き締まる気持ちになったのを記憶している。



図1 杉並公会堂・外観 (杉並公会堂HPより)



図2 杉並公会堂・大ホール (杉並公会堂HPより)

② 「定期演奏会」開催までの1ヵ月

本校に着任し、初めての「定期演奏会」に向かうまでの1ヵ月は激動の1ヵ月だった。まず驚いたことは、演奏会で「劇」をやる、ということだ。それもただの劇ではない。ハリーポッターの世界を中心に、主人公3人が色々な世界を回って成長していく姿を、部員の演奏をバックに役者が演じるというものであった。このアイデア力には純粋に驚かされた。が、アイデアが壮大な分、実際に演技をすることは並大抵のことではなく、部員も非常に苦戦していた。セリフとジェスチャーだけで世界観を表現することの難しさ、自分の楽器練習と劇練習との両立の難しさ等、課題は山積みであった。私は自分の中学・高校時代で学んできた経験や、その場で思い浮かんだアイデアを生徒に伝える程度しかできなかったが、生徒たちは自分たちのステージに上手く取り入れ、顧問の瀬立先生・井畑先生やコーチと共にこの困難を乗り越

え、ようやく演奏会当日を迎えることができた。

③ 演奏会当日に起きた「予想外」の出来事

数々の困難を乗り越えた部員たちは緊張の面持ちで、会場に姿を現した。待ちに待った演奏会当日。不安要素はあるものの、このまま順調に進むと思われた。が、我々は一つ忘れていたことがあった。それは、「リハーサルの進行を誰がやるのか」ということだ。座奏^(*4)であれば、指揮を振る瀬立先生に仕切っていただくところだが、「劇」は部員たちが考え作り上げてきたものなので、リハーサルも生徒がやるのが一般的であろう。しかし、そのことをすっかり失念していた我々は、いざリハーサルを始めてみるとこの問題とその問題の大きさに気付く。誰が仕切るのか…しばらく沈黙が続く。この状況はまずいと思い、ずっと劇を仕切っていたリーダーの生徒に「舞台に入るタイミング」や「セリフを言うタイミング」などを1つずつ確認させ、何とかリハーサルを終える。

そして、各々「劇」に不安を持った状態で、本番の時間を迎える。正直、演奏に集中できるはずもない。しかし、時間は待つてはくれない。慌ただしいまま本番の時間を迎え、なんとか1部^(*5)の演奏を終えた。そして、迎えるは山場の2部の劇。そこで待ち構えていたのは「止まってしまうのではないか」という不安を振り払うかのような部員たちの生き生きとした演技と演奏。1時間半（これほどまで長かったことは後日発覚した）という大作を見事演じきったのであった。もちろんつなぎが不自然な部分などはあったが、この時の状況を考えると「ベストを尽くした」パフォーマンスだった。私はこの時に「國學院高校吹奏楽部の部員には本番に強い人が多いな」ということを強く印象付けられた。それと同時に、忘れてはならないことは、この演奏会のために駆けつけて手伝いをしてくれたOB・OG、忙しい中駆けつけてくれたコーチ、そして「顧問」かつ「指揮者」として部員と向き合い続けた瀬立先生の努力であろう。部員、顧問、コーチ、OB・OG全員で作あげた演奏会に、ただただ感動するばかりであった。

④ 手に入れた「自信」と、見えてきた「課題」

演奏会を終えた次の日、生徒たちは3年生の送別会へ。この会では、3年生へのサプライズとして2年生とOB・OGと顧問で共演し、数曲演奏した。このサプライズには3年生も驚きと嬉しさの入り混じったような様子だった。そして、その後引退する3年生たちの中のリーダーたちが言葉を選びながら、話し始めた。各々、引退を迎えるにあつたての様々な思いを語ってくれたが、共通していることは「仲間に感謝をしたい」という内容と、皆清々しい表情をしていたことであった。壮大な劇を仕切っていたリーダーの話の中で印象に残ったことがある。それは「自分は劇中に『仲間を信じて』という言葉を入れたが、正直綺麗事だと思っていた。でも、この演奏会の本番を通して心から『仲間を信じる』ということを感じることができた。」という内容である。「定期演奏会」を通じて部員たちが得るものの大きさを痛感した瞬間だった。

しかし、その感動と同時に感じたことがある。それは「演奏会」としての課題だ。①の項目で述べた通り、この「定期演奏会」は「単独」で開催する演奏会である。それ故、演奏だけでなく、当日の演奏ステージのセッティングや演奏会の進行はもちろん、ホールの担当者の方と事前の打ち合わせ^(*6)も部員たちが行う。その事前打ち合わせの方法や準備の不備、当日の進行表の時間設定の甘さなど、「演奏会」の運営面での課題と、1つの「ステージ」としての完成度の面（演奏はもちろん、劇のつながりやアイデアなど）での課題が浮き彫りになった演奏会でもあった。

(3) 6月の体育祭

① 文化の違いを感じた瞬間

本校の吹奏楽部は6月の体育祭の時に毎年演奏をしていると聞き、何の曲をやるのか部員に聞いてみると「星条旗よ永遠なれ」という吹奏楽のマーチ（行進曲）の定番曲の名前が返ってきたので、「やはりどの学校も同じような曲をやるのか」と納得した。が、実際に合奏^(*7)を見てみると、ほとんどの部員が「今回演奏することになって初めて知った」という事実を知り、衝撃を受けた。また、その曲で「バトン部」との共演をするということでもまた衝撃を受けた。「文化の違い」を実感した瞬間であった。

② 「代替わり」の難しさ

体育祭本番が近づくとつれて部員たちが感じた困難は、「代替わり」である。体育祭は5月の演奏会が終わって代替わりをし、2年生と新入生の新体制で臨む初めての本番にあたる。当然3年生が抜けた穴は大きく、いきなり新体制で臨む2年生と、いきなり本番を迎える新入生は共に困惑していた。体育祭の予行では周りの先生方に心配される事態にまで発展。そんな状況を心配した3年生が数名応援に駆けつけ、部活動の危機を救ってくれた。応援に駆けつけてくれた3年生の心意気と、不安な中ベストを尽くした1・2年生の頑張りを称えたい。体育祭本番は無事に終えることができた。

(4) 6月のバンドフェスタ

① バンドフェスタとは

体育祭が終わり、吹奏楽部の次の本番は「バンドフェスタ」だった。この本番は東京都の吹奏楽連盟が主催している本番で、全国大会に出場するような強豪校から規模は大きくはないが楽しく音楽をやりたいという学校まで、東京都の約30校の高校が一堂に会するというイベントであった。本校吹奏楽部のような、普段外部のホール施設を使つての練習ができない学校も「府中の森芸術劇場」^(*8)という大きいホール（夏に開催される東京都吹奏楽コンクールの会場でもある）での本番を経験することができるという利点や、強豪校を含め様々な学校の演奏ができるといった利点がある。

② 新2年生と新3年生の融合

このバンドフェスタは新入生が本校吹奏楽部として出演する初めての本番^{(*)8}であり、新入生は不安と期待が入り混じった心境でこの本番に向けての練習を心待ちにしていた。が、そんな初々しい新入生に大きな困難が訪れる。それは本校吹奏楽部の特徴の一つでもある「振り付きの演奏」^{(*)9}である。この本番は「お祭り」ということもあり、本校の吹奏楽部はポップスの曲^{(*)10}を3曲演奏することになっており、そのポップスの曲ではただ座って演奏するのではなく、動きながら演奏する「振り付きの演奏」をすることになっていた。これが新入生にとっては大きな試練になった。なぜなら、この「振り付きの演奏」というものは全ての中学校が採用しているものではなく、経験したことがある人とない人で技術面での差が出てしまったからだ。そして、音楽というものは時に残酷で、お客さんは「あ、あの子初心者だけど頑張っているね」なんて思ってくれることはなく、みな平等に「上手いか下手か」の評価を下す。この一種のジレンマを抱えながら、「先輩初心者」の2年生が新入生の面倒を見ながら自分たちの練習も行わなくてはならなかった。これは新2年生にとっても大きな試練となったのである。しかし、ここでも活躍したのは新3年生であった。この3年生たちは5月の定期演奏会で「まだ引退したくない!」「もっと演奏したい!」と思って部活に残ってくれた先輩であり、この生徒たちが新2年生を上手にサポートしつつ、新入生に丁寧に動きを教えていった。この結果少しずつ演奏も動きもまとまっていき、皆一定の自信を持って本番当日を迎えることができた。

③ 本番当日感じた「衝撃」と「達成感」と「課題」

迎えた本番当日。新入生と新2年生は期待と不安を胸にそれぞれ初々しい面持ちで学校に登校してきた。それとは半面、この本番で引退してしまう新3年生たちは感慨深げでどこか名残惜しそうな面持ちで学校に登校してきた。そして学校で最終確認をして、準備をしてからいざ会場へ。会場は学校から電車で行くことができる場所にあったため、部員たちは電車で移動する。この時、一般の歩道に60人近くの生徒が一斉に歩いていたら歩行者の方に迷惑がかかってしまうので、本来はリーダーたちが「道を広がって歩かない」といった注意をすべきものだが、自分たちも盛り上がってしまいなかなか注意をしない。見かねた私は生徒たちに交通ルールを守るなどの単純な注意を行ったが、このことは「部活の一員」として、また「リーダーとしての在り方」を教える必要があると感じた瞬間であった。そして、一行は会場に着くとここでも衝撃を受ける。どの高校も「こんにちは!」と清々しい挨拶を交わしてくれる。これには部員たちも戸惑ってしまったようである。そんな精神状態のまま慌ただしく本番を迎える。生徒の緊張は音楽に現れてしまっていたが、ダンスも演奏もなんとか乗り越えることができ、胸をなでおろしたのであった。新入生は本校吹奏楽部として初めての本番、新2年生は先輩として初めての本番、新3年生は高校生活最後の本番とそれぞれ達成感を感じたようであった。



図3 府中の森芸術劇場・外観（府中の森芸術劇場HPより）



図4 府中の森芸術劇場・大ホール（府中の森芸術劇場HPより）



図5 バンドフェスタ・「マイケルジャクソンメドレー」

(5) 夏合宿と8月のコンクール

① 吹奏楽部員にとっての「夏」とは

他の部活動と同じように、吹奏楽部員にとっての夏は大変充実した時期となる。人によっては地獄の夏になる場合もあるし、好きなことに没頭できるため生き生きする場合もある。どちらにせよ、この夏は「野球応援」「夏合宿」「コンクール」と行事が盛りだくさんな時期であり、「部」としても「個人」としても成長できる時期であることは疑いない。また、数々のドラマが生まれるのも吹奏楽部の夏の醍醐味であろう。本校吹奏楽部はそのような熱い夏を迎えることになる。

② 試練と感動をもらった「野球応援」

まず、この「野球応援」という本番の最大の試練は「体力」である。真夏の炎天下で10曲近く吹き続けるということだけでも、相当な体力がいる。それに加えて、試合状況を判断して曲をすぐ吹き分ける必要がある。その場合、試合も指揮者も両方注意してみなければならぬ。このように「野球応援」では、真夏の炎天下の中、試合と演奏の両方に意識を向けるといって「体力」を要求されるという過酷なイベントなのだ。しかし、悪いことばかりではない。同じ高校生が甲子園という夢の舞台を目指して必死にプレーする姿を見て、部員たちは「自分たちもやるぞ」という夏のコンクールへの決意を新たにするのであった。生徒の顔つきが心なしか逞しく見えた瞬間があり、「野球応援」を通して、自分のためではなく「人のために全力を尽くす」という「奉仕の精神」と、苦しい時も踏ん張るといって「忍耐力」を学ぶことができたようである。

③ 「地獄の5日間」、そしてコンクールへ。

まもなく合宿が始まる。この合宿は、勉強との両立を図るために普段の長期休暇中の下校時間が15:30と比較的短い活動時間で練習を行っている本校の吹奏楽部にとって夏のコンクールに向けた大事な期間である。この夏合宿はとにかく「練習」する。あつていなかった音程、縦のライン、イメージなど、普段の練習では気を付けることができないことを中心に練習を進めていく。この練習で心が折れそうになる部員、それを支える部員、様々な部員の働きによって少しずつ一体感を増していった。そしてこの「地獄の5日間」を乗り越えた部員たちを待ち構えるのはコンクールである。コンクールの前日に不安で泣き出す部員。極度の緊張によってピリピリする部員。様々な問題が起きてくる。しかし、このすべてが人間的なものであり、「人間ピンチの時ほど人間性が試されているものだな」とつくづく思うのであった。結果は銀賞だったが、部員の成長と部の成長を感じることができた本番であった。

3. 終わりに

吹奏楽部での最初の半年を通して、部員の実態や部活の雰囲気、吹奏楽部の課題などを感じることができた。次回は、下半期の活動を報告する。

- *1 吹奏楽とオーケストラの両方を演奏していたため、このようなクラブ名になっていた。
- *2 人数等の関係で「単独」でなく複数の学校で合同で開催される場合もある。
- *3 大ホールは約1200席収容している、非常に充実した施設。図1、2参照。
- *4 吹奏楽では、座って演奏する「座奏」と、マーチングなど立って演奏する「立奏」がある。
- *5 この時の演奏会は2部構成であった。1部は「レ・ミゼラブル」などの吹奏楽の曲を演奏する「クラシカルステージ」。2部は、部員の演奏をバックに劇をするという「ポップスステージ」であった。
- *6 「ホールの担当者との事前の打ち合わせ」では、「演奏会の内容」の確認を行う。具体的には「人数・椅子の数」「舞台の増設の有無」「本番で使用する照明機材の数や種類」「マイクの本数」「スタッフ増員の有無」等がある。この打ち合わせを元に、担当の方にホール使用料以外の見積もりを出してもらい、機材等の最終決定をする。この打ち合わせでは、ホールの担当者の方は部員たちを「大人」として接してくれており、部員たちが「大人」として取るべき態度を考えさせてもらう良い機会となる。こちらの準備がしっかりしていれば約1時間半で終わるが、この時は約3時間かかった上に、もう一度打ち合わせをすることになった。
- *7 全員で吹いて音合わせをすること。部員たちが練習してきた成果を確認する場でもある。
- *8 大ホールは約2000席収容。東京都吹奏楽コンクールの予選と都大会（本選）の会場にもなっている非常に充実したホール。図3、4参照。
- *9 これは本校のコーチである吉岡正人先生が数年前にいらしてから始まった演奏スタイルで、徐々に定着してきており、今では本校吹奏楽部の特徴の一つとなっている。図5はバンドフェスタ本番の写真。曲は「マイケルジャクソンメドレー」で、ダンスも入れている。
- *10 いわゆる「歌謡曲」だけではなく、クラシカルな曲以外全般の曲を指す。